

# 看護師の職業的アイデンティティについての一考察

## 1 階東病棟

○ 稲田 美香   梶田 賢   山口 奈美   土井啓子  
今宮 一禎   杉村 利恵   久市 修佳   曾我美代  
小松 佳子   岡林 安代

キーワード：職業的アイデンティティ、自我同一性、看護師、看護管理

### 1. はじめに

医療現場では様々なコメディカルが発展し、その役割をそれぞれが定義して明確化している。そのような現状の中で看護師の役割が不明瞭化してきていると言われている。それを明確化するためには、看護職が専門職であるということを看護師自身が認識すると共に、社会的にその専門性を承認されることが重要である。そのためには、看護師と接する患者が実体験を通じてその専門性に気づくことが必要であり、看護師は看護の質の向上に努めなければならない。グレッグ美鈴<sup>1)</sup>は、「よりよい看護の質の向上のためには看護を提供する看護師としての自己認識、すなわち職業的アイデンティティの確立が非常に関係している」と述べている。

本研究を行うにあたり既存の文献を検索した結果、看護師以外、また看護学生についての職業的アイデンティティに関するものは数多く研究が行われているのに対し、臨床看護師の職業的アイデンティティについての研究はここ数年注目されている段階にあった。より高い専門性を求められている現在、看護師の職業的アイデンティティについて知り考察することで、その関連因子を改善・強化・促進し、これまで以上の職業的アイデンティティを確立することができる。そして看護の質の向上・看護職における専門性の社会的承認に繋がると考え、本研究を行うことにした。

### II. 研究目的

看護師の職業的アイデンティティを明らかにすることを目的として、①看護師の職業的アイデンティティの構成要素のそれぞれの内容を明らかにする、②看護師の職業的アイデンティティに作用する影響因子を明らかにする。

### III. 概念枠組み (図1)

グレッグ美鈴が様々な文献を基に、看護師の職業的アイデンティティの構成要素を提示している。しかし、その影響因子にはプラス因子として考えられるものや不確かな因子として取り上げられているものはあるが、明確にマイナス因子として考えられたものはなかった。そこで既存の研究結果を基に、職業的アイデンティティを「職業との自己一体意識」と定義した。そして、

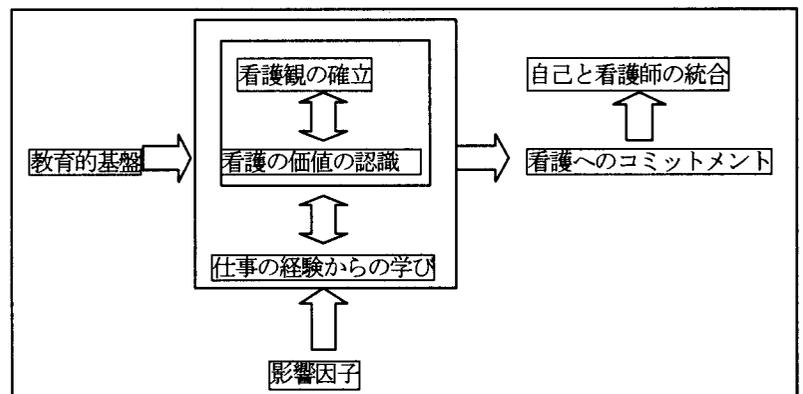


図1. 概念枠組み

【教育的基盤】【仕事の経験からの学び】【看護の価値の認識】【価値観の確立】【看護へのコミットメント】【自己と看護師の統合】【影響因子】の7つから構成されていると考え、独自の概念枠組みを作成した。

### IV. 研究方法

1. 研究デザイン：質的研究
2. 対象数・特質：本研究に協力が得られた看護師8名
3. データ収集期間：平成14年7月末～8月末
4. データ収集方法：半構成的インタビューガイドを作成し、30分～1時間程度の面接を行った。面接を行

うにあたってはプレテストを実施し、インタビューガイドの修正を行った。面接内容については、対象者の承諾が得られた場合テープに録音し、承諾を得られなかった場合はその内容を記録した。

5. データ分析方法：職業的アイデンティティについて表出されていると思われる場面をインタビュー内容から抽出し、KJ法により分析を行った。

## V. 倫理的配慮

1. 対象者に研究の目的及び方法について説明した。
2. 対象者の権利を守るために、以下の事を説明した。
  - 1) 研究の協力は自由意志であり、協力を同意した後でもいつでもこれを撤回できること。
  - 2) 研究に協力しなくても不利益を被らないこと。
  - 3) 対象者のプライバシーを厳守し、得られたデータは研究目的以外には使用しない。
  - 4) 研究終了後はデータを破棄することを約束する。
3. 研究成果の公表について説明した。
4. プライバシーが保護された環境で面接を行った。

## VI. 結果

### 1. 対象者の概要

当院に勤める看護師8名で全て女性である。年齢は25～46歳で平均年齢は32.6歳であった。看護経験年数は4～26年で、平均12.25年であった。最終学歴は3年過程の看護学校6名、看護短期大学1名、4年制大学(看護学部)1名であった(表1)。

表1. 対象者の概要

年齢	25～29歳：2名 30～34歳：4名 35～39歳：1名 45～49歳：1名
看護師歴	1～5年：1名 6～10年：4名 11～15年：1名 16～20年：1名 25～30年：1名
最終学歴	看護専門学校：6名 看護短大：1名 大学(4年制)：1名

### 2. 看護師の職業的アイデンティティの構成要素とその影響因子(表2)

当院看護師の職業的アイデンティティの構成要素は、【動機】【信念】【経験からの学び】【ジレンマ】【自己効力感】【向上心】【看護へのコミットメント】【キャリア】【役割】【社会の評価】の10個であった(図2)。その影響因子として【環境】という1つのカテゴリーが抽出された。

1) 【動機】とは、その人自身が看護師を志したきっかけや意識的または無意識な欲望である。これは、[あこがれて][入院を経験して][他者に勧められて][専門職を希望して][自分を活かしたくて]の5つから構成される。

2) 【信念】とは、学生時代に授業や実習を通して培われ、実際仕事を続けていく中で看護師としての心構え、患者への姿勢・振る舞いなど自分自身が大切にしている思いとそれに伴う行動である。これは、[初心・素直な心を忘れない][言葉がけに注意する][対応に注意する]相手の立場に立つ[患者・家族の希望に添う]の5つから構成される。

3) 【経験からの学び】とは、学生時代から現在まで仕事を続ける中で経験、学習した自分の仕事や自分を取り巻く状況の振り返り・気づきである。これは、[学生時代の経験][看護師に対するイメージ][自身の看護への気づき][人間関係の重要性][自身の看護の未熟さ]の5つから構成される。

4) 【ジレンマ】とは、看護師の仕事を継続する中で相反する二つの事の板ばさみになって、どちらも決めかねる状態や状況の変化に対応できない状態である。これは、[仕事をする上での難しさ][家庭との両立の難しさ]の2つから構成される。

5) 【自己効力感】とは、その人自身が看護師の仕事をしていて、他者に効果を及ぼす事のできる力を実感

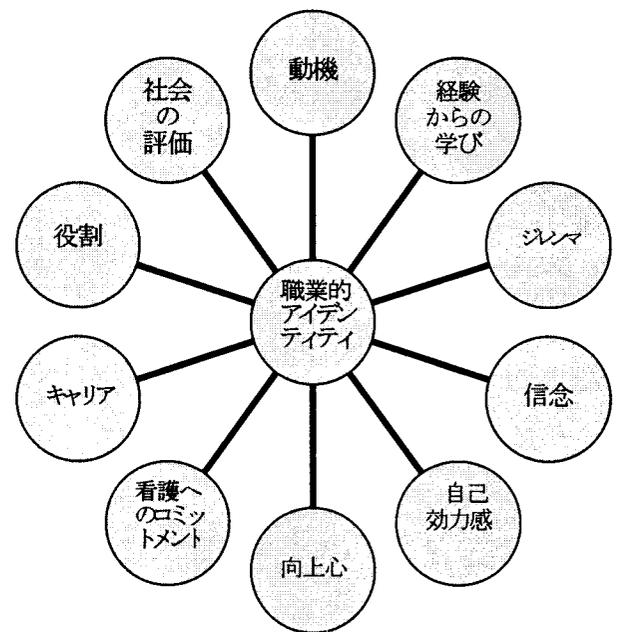


図2. 看護師のアイデンティティの構成要素

できたという思いや、やりがいである。これは、[人の役に立っている] [承認されている(患者から)(スタッフ から)] [充実感を得る] [やりがいを感じる] の4つから構成される。

- 6) 【向上心】とは、看護師の仕事を続けていく中で今より優れた状態を目指そうとする心、また今の状態を継続していくことである。これは、[学習意欲] [資格習得] [現状維持] の3つから構成される。
- 7) 【看護へのコミットメント】とは、その人自身が持っている看護の仕事に対する熱意・誇りや傾倒である。これは、[仕事への思い] [仕事の継続] の2つから構成される。
- 8) 【キャリア】とは、看護師の仕事を続けていく中で経験、学習して培われる実績・自信である。[成長した] [頼りにされる] の2つから構成される。
- 9) 【役割】とは、その人自身の職場や家庭での立場、割り当てられた役目を果たす事である。[職場での役割] [家庭での役割] の2つから構成される。
- 10) 【社会の評価】とは、一般社会における看護師の仕事や社会での捉え方である。[職業に対するイメージ] [マスコミからの影響] [認知の低さ] の3つから構成される。
- 11) 【環境】とは、看護師の職業的アイデンティティの構成要素には含まれないが、その形成・確立に作用・影響すると考えられる因子である。これは、[人間関係] [労働状況] の2つから構成される。

表2 看護師の職業的アイデンティティの構成要素とその影響因子

動機	あこがれて	小さいときの憧れ / 看護師と接しての憧れ	
	入院を経験して	入院時看護師が優しかった	
	他者に勧められて	母親の勧め / 学校の先生の勧め	
	専門職を希望して	手に職をつけたくて / 自立した職に就きたくて	
	自分を活かしたくて	人と関わることが好き / 人の世話をすることが好き	
経験からの学び	学生時代の経験	実習の時の学び / 技術・知識の学び	
	看護師に対するイメージ	責任の伴う仕事 / 看護を実践するために根拠となる知識が必要	
	自身の看護への気付き	他者に対する尊重 / 信頼などの重要性に気付いた 分からないまま対応せず確認して対応する	
	人間関係の重要性	1対1ではなくチームプレイ、引き継ぐ人のことも考えないといけない 患者・スタッフ個人に合わせた指導(看護)が必要 / 患者の家族への配慮	
ジレンマ	自身の看護の未熟さ	自分自身の看護はまだ未熟 / 患者さんの生の声を聞いて日々反省した 患者の希望にすぐ対応できない / 看護を患者が受け入れてくれない	
	仕事をする上での難しさ	患者への指導が思うような結果が出なかった してあげたい看護が時間がなくて十分にできない	
	家庭との両立の難しさ	仕事・家庭共に優先できない	
信念	初心・素直な心を忘れない		
	言葉がけに注意する		
	対応に注意する		
	相手の立場に立つ		
	患者・家族の希望に添う		
自己効力感	人の役に立っている	元気になる姿を見る / 感謝の言葉をもらう	
	承認されている	手紙・葉書をもらう / 名前を覚えてくれる / 話しかけてくれる	
	一患者から一スタッフから	行った看護を認めてもらう 共感してもらえ / 支えてくれる / 協力し合える / 行った看護を認めてくれる	
	充実感を得る	楽しみながら仕事をしている / 自分の力を発揮できる	
	やりがいを感じる	仕事をする中で自己成長ができる	
向上心	学習意欲	最新の医療を勉強したい(研修など) / 患者と接する上で学んでいきたい 集中して勉強したい / 今の所属している科の領域を勉強したい	
	資格取得	専門看護師の資格を取りたい / ケアマネージャーの資格を取りたい	
	現状維持	現状を維持していきたい	
看護へのコミットメント	仕事への思い	誇りを持っている / 看護の仕事が好き / やりがいを感じる	
	仕事の継続	仕事を続けていきたい / 辛くても辞めようとは思わない	
キャリア	成長した	仕事に誇りを持てるようになった / リーダーを始めて周りが見えるようになった	
	頼りにされる	プリセプターをしている / 技術的なことで聞かれる	
役割	職場での役割	副師長 / 委員 / リーダー / プリセプター	
	家庭での役割	妻 / 母親	
社会の評価	職業に対するイメージ	これからも必要な仕事 / 夜勤があり大変な仕事 / 忙しい仕事 役に立つ仕事 / 責任のある仕事	
	マスコミからの影響	医療事故をよく起こしている / 知識を悪用している / マスコミに取り沙汰される	
	認知の低さ	仕事内容が理解されていない	
環境	人間関係について	チームワーク	仕事をしやすい雰囲気がある
		理解・支援	連携が取れている / 同僚も仕事が好き / 安らげる場の存在 先輩・上司に恵まれている / 家族の理解・支援がある
		非協力的	協力を得られない / 人間関係がよくない
	労働状況について	忙しい / 過酷な勤務体制 / 人手不足	

## Ⅶ. 考察

看護師の職業的アイデンティティの構成要素として、【動機】【信念】【経験からの学び】【ジレンマ】【自己効力感】【向上心】【看護へのコミットメント】【キャリア】【役割】【社会の評価】という10の大カテゴリーが明らかとなった。これらを分析・考察していく中で、それぞれが関連・影響し合い職業的アイデンティティの形成・確立がなされていると考えられた。

【動機】は、それがはじまりとなり看護師としての職業的アイデンティティが形成されていくと捉えられた。

【経験からの学び】の構成要素の一つである《学生時代の経験》からの学びは、実際に看護師として働き始めさまざまな経験をしていく中で、その学びと実際とのギャップ・相違点に気づき【ジレンマ】を感じていた。そして、それらのことを自身に問いかけ、悩み・振り返ることで新たな学びへと繋がっていた。その学びは、【経験からの学び】の他の構成要素である[仕事としての学び][自分自身についての学び・気づき]に分類することができる。また、【信念】を日々の看護実践に活かしていくと共に、経験からの学びを得て行く中で、新たな信念が形成されていくと捉えられた。

このように新たな学びを得ながら、日々の経験を積み重ねていくことで、看護師は自分の行った看護から【自己効力感】を得ることができていた。これは、他者との接触の中で得ることのできる自己への肯定的な感覚である。こういった感覚は、他者からの承認感や日々の充実感を生んでいた。他者から認められるという経験・感覚は、自己に肯定的なフィードバックを起こさせると共に、自己または仕事に対する自信、仕事へのやりがいへと繋がっていた。そして、その自信とやりがいは次へのステップとしての【向上心】を生むと共に、【看護へのコミットメント】をより強化していくと考えることができた。グレッグ美鈴<sup>2)</sup>は、アメリカのCNSの職業的アイデンティティを確立するプロセスの研究の中で、「他者から認められるという体験は、自信とプライドを生じさせ、CNSとしてのコミットメントを強めている」と述べている。このことから私達の研究においても同じ結果が導き出されたといえるだろう。

看護師の職業的アイデンティティを構成するものとして、その他に【社会の評価】【役割】【キャリア】が挙げられた。これらは職業的アイデンティティの構成要素であると共に、職業的アイデンティティを確立していく上で経るプロセスの様々な場面に影響を及ぼしていると考えられた。

Erikson<sup>3)</sup>は、職業的アイデンティティに作用するものとして、両親の価値や願望、個人の能力や教育的背景、仕事に及ぼす状況的要因や社会的要因があると述べている。両親の価値や願望・個人の能力や教育的背景は【動機】や【経験からの学び】の一部として、仕事に及ぼす状況的要因や社会的要因は、【社会の評価】【役割】【キャリア】などの一部として抽出された。今回、構成要素以外のものとして看護師の職業的アイデンティティの形成・確立に影響する因子を抽出することができ、これらはEriksonのいう職業的アイデンティティに作用するものであり、私達が当初考えた関連因子に当たるものではないかと考えた。

【環境】のサブカテゴリーである[人間関係]は《チームワーク》《理解・支援》《非協力性》《非信頼性》に、[労働状況]は《忙しい》《過酷な勤務体制》《人手が足りない》によってそれぞれ構成されていた。[人間関係]の《チームワーク》《理解・支援》については、同僚や上司、家族などから得られる感覚であり、仕事に対しやる気を起こさせたり、ポジティブな考え方を生じさせたりする。これは、看護師の職業的アイデンティティに正の作用を及ぼすものであると捉えることができた。

これとは反対に、[労働状況]の《忙しい》《過酷な勤務体制》《人手が足りない》や、[人間関係]の《非協力性》《非信頼性》は、看護師の職業的アイデンティティに負の作用を及ぼすものであった。このような環境があることで、当事者には不満や不安が生じており、看護職に対するコミットメントまでに至るプロセスが立ち止まっている状態、もしくは逃避している状態にあると考えられた。[労働状況]は身体的・精神的な疲れを助長させる一因であり、そのことが現状からの逃避を引き出しいるのではないかと予測された。

他者から認められるということが、アイデンティティの形成において重要な事象であることが今回の研究においてわかったが、非協力性・非信頼性という感覚は自尊感情を低下させたり、仕事に対する投げやりさを生じさせているのではないかと考えられた。そういった状況に過酷な労働状況が重なることで、より職業的アイデンティティの形成・確立を困難なものとすると思われた。

## VIII. おわりに

看護師の職業的アイデンティティの構成要素と内容が明らかとなり、それらに作用するものとして、正・負の影響因子が抽出された。日々看護を実践し他者と接していく中で、様々な経験をし自己に問いかけ学びを得、他者より承認されることで自信を持ち向上心を生み、自己と看護のコミットメントを強化するというプロセスを繰り返し、看護師の職業的アイデンティティは形成され確立していくものであり、他者に認められているという感覚を得ることは、職業的アイデンティティの形成において非常に重要であると捉えることができた。

本研究では対象者が少数であったこと、面接技術や分析能力の未熟さ、既存の文献が少なく分析が不十分であった等の限界があった。これらの点を考慮し、さらに研究を展開することで今後の看護の質の向上・看護職における専門性の社会的承認に繋がっていければと考える。

## 引用・参考文献

- 1) グレグ美鈴：看護における一重要概念としての看護婦の職業的アイデンティティ, *Quality Nursing*, 6 (10), 2000.
- 2) グレグ美鈴：アメリカの CNS が職業的アイデンティティを確立するプロセス, *看護*, 53 (1), 2001.
- 3) E.H.Erikson：自我同一性 —アイデンティティとライフサイクル, 誠信書房, 1982.
- 4) グレグ美鈴：看護師の職業的アイデンティティに関する中範囲理論の構築, *看護研究*, 35 (3), 2002.
- 5) 安本とも子：看護婦の職業選択の動機と Identity の関連について, *日本看護研究学会雑誌*, 18 (4), 1995.
- 6) 波多野梗子、小野寺杜紀：看護婦の熟達化と職業的同一性, *日本看護科学会誌*, 11 (3), 1992.
- 7) 鈴木和美：中堅ナースとしての自己認識の成長ジレンマを超えて, *ナースステーション*, 19 (1), 1989.
- 8) 遠藤辰雄：アイデンティティの心理学, ナカニシヤ出版, 1981.
- 9) 船津衛：自我の社会理論, 恒星社厚生閣, 1983.
- 10) 速水敏彦：自己形成の心理—自律的動機づけ—, 金子書房, 1998.
- 11) 速水敏彦：動機づけの発達心理学, 有斐閣, 1995.
- 12) 岡本祐子：成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究, 風間書房, 1990.
- 13) 鑪幹八郎：アイデンティティの心理学, 講談社現代新書, 1990.
- 14) 古津紀久子：職業的アイデンティティについての一考察, *関西学院大学臨床教育心理学会年報*, 2001.
- 15) 豊嶋三枝子・木村久美子：看護学生の職業的アイデンティティの形成における臨床看護の役割—社会化とコミットメントの視点から—, 第28回日本看護学会集録(看護管理), 1997.
- 16) 能條多恵子：臨床看護における「看護職の役割と業務」, *看護管理*, 8 (8), 1998.